

## 富岡川 子安橋より

姉

妹

おっさん

紙さん

福島県富岡町、海の方へと歩く姉妹。ある四月のこと。

姉「もう桜はこりごり」

妹「ふーん、タンポポは？」

姉「タンポポは、食べれるからマシ」

妹「桜も食べれるよ」

姉「お腹すいたんでしょ」

妹「うん、ちょっと」

姉「おにぎり食べる？」

妹「まだいい」

姉「強がり言って」

妹「ついたら食べるもん」

姉「偉いね、いい子だね」

妹「やめてよ、もう大人だよ」

姉「まだ10歳でしょ？」

妹「もうすぐ11だもん」

姉「そうだね」

黒い袋に入った除染廃棄物が積み上げられている。

妹「うわー見て」  
姉「すごいね」  
妹「誰が捨てたのかな」  
姉「誰だろうね」  
妹「なんか書いてる。読める？」  
姉「読めない。お姉ちゃんも勉強しなきゃね」  
妹「私もするー」  
姉「ねえ、匂わない？」  
妹「お姉ちゃんおならした？」  
姉「くーちゃんじゃないんだから」  
妹「私はしないもん」  
姉「潮の匂いだよ」  
妹「ほんとだ」  
姉「もうすぐだね」  
妹「うん」  
姉「ねえ」  
妹「何？」  
姉「ごめんね」  
妹「何が？」  
姉「連れ出して」  
妹「そんなことないよ」  
姉「そう？」  
妹「お父さん嫌いだもん」  
姉「嘘、好きでしょ」  
妹「お姉ちゃんの方が好きだもん（駆け出す）うわー」  
姉「（追いかけて）ちょっと待ってよ」

海が見える。

妹「うわー、海だ」

姉「海だ」

妹「うわー」

姉「見て、お城みたいなのがある」

妹「あっ、本当だ」

姉「見て、あれは帽子みたい」

妹「お姉ちゃんだけずるい」

姉「くうちゃんも探してごらん」

妹「えっとね、えっと、見てあれ、お風呂みたい。お風呂お風呂、湯加減どうですかー」

姉妹「湯加減どうですかーはははははー」

無邪気に笑いあう二人。

橋の方からおっさん登場（以後表記は「お」）

お「うっさいねん、さっきから、何盛り上がとんねん」

妹「言葉おかしいよ、あの人」

姉「しっ、話しかけちゃダメよ」

お「なんやねん。ケダモノやないで、わしは」

姉「あの、うつるからやめてください」

お「なんやねん、わしは病原菌か、インフルエンザか、大腸菌とちゃうで」

妹「何、その言葉？」

姉「こら、ダメよ」

お「関西弁や、大阪弁や」

妹「関西弁？ 大阪弁？ どっち？」

お「どっちもや。まあ、大阪弁や」

姉「ややこしいこと言わないでください」

お「つまり、ここじゃなくて南の方、ずっと遠くで話されてる言葉ちゅうこっちゃ」

姉「そこから来たんですか？ その大阪から」

お「ちゃう、わしは生まれも育ちもここや、バリバリの地元民やで」

妹「お姉ちゃん、この人おかしいよ」

姉「うん、行こう」

お「待ちいや、大阪の人間やないのに、大阪の言葉話したらおかしいんか？」

姉「おかしくはないけど……やっぱりおかしいです」

お「あーかなわん。せやったら、黒人はみんな足が速いんか？外人が連れてる日本の女はみんなブスカ？ ちゃうよな？ それみんな偏見や」

姉「そうかもしれないけど、例えがよくわかりません」

お「も一四の五言わんと、こっち来てみ」

姉「いやです」

お「騙された一思うて」

姉「やっぱ騙してる」

お「騙してへんよ、困っとるんやろ？な、困っとるんやんな？」

姉「何も困ってません」

お「なんやねん。こんなところで、姉妹が二人、歩いとったら、そりゃ、困ってるっちゅうこっちゃで」

妹「お母さんに会いに行きます」

お「そうか、そやろ、なんやねん、そんな、母をたずねて三千里みたいな設定は。おっちゃんそれだけで、泣いてまうわ」

姉「母をたずねて三千里ってなんですか？」

お「これだから平成生まれは、アニメや悲しいアニメや」

妹「悲しくないもん」

姉「私たち、もう場所は知ってるんです。その橋を越えたところなんです」

お「そうか、地図とかあるんか？」

妹「（地図を渡す）これだよ」

姉「こら」

お「大丈夫や、ちょっと見るだけや。なにになに、海が見えたら、ほうほう、橋を越えて、道なりに行き、右へ曲がり、坂を上がる。なるほど、あそこか、顔なじみやでそこ、おっちゃんが案内したるわ」

見合う姉妹。

姉「やめとこ」

妹「でも、悪者じゃないみたいだよ、言葉は変だけど」

姉「でも、うちらでも行けるよ」

妹「結構ここまで迷ったじゃん」

お「案内したんで」

妹「お姉ちゃん」

姉「……お願いします」

お「おう、任せとき。その前にな、ちょっとこっち来てくれるか？」

姉「橋ですか？」

お「おう、おっちゃんの仕事場や。ちょっと手伝ってき」

妹「車が多いね」

お「気いつけや」

姉「えっ、ここで暮らしてるんですか？テント」

お「せや。ここがおっちゃんの仕事場兼住居や。どうや贅沢やろ」

妹「何のお仕事？」

お「ちょっと見とき」

車が通る。

お「おっ、253番。あっ、惜しいなー255やったらリーチやった。残念やで」

姉「何してるんですか」

お「見て分からへんか？ビンゴや、ビンゴ大会や。ここにたくさん車が来るやろ、それをほら、このカードで埋めてくんや。ほら、これがリーチになった分」

妹「わー、たくさん」

姉「ビンゴって、結婚式か何かですか？家族ですか？友達ですか？」

お「ちゃうよ、結婚式なんてないよ」

姉「やっぱ狂ってる。行こ」

お「結婚式がなければビンゴやったらあかんのか？わしは未来の結婚式のためにここにいろんや、もう二次会何回やったか分からへん」

姉「未来の結婚式って何ですか？」

お「それは、何や、例えばお姉ちゃんの結婚式や。お姉ちゃんはまだ彼氏とか、いいひん  
かもしれへんけど、そういう、まだ結婚しない誰かのための結婚式や」

妹「揃ったら、何かもらえるの？」

お「ぎくっ、それは聞かんといってくれや。でも結婚するだけでめでたいやないか。おっ、  
51番、イチローの背番号や。あーでも無いか」

紙さん登場（以後表記は「紙」）。

お「おう、紙さん」

妹「神様？ お姉ちゃん、神様だって。（祈る）ナムナムナムナム。ほら、お姉ちゃんも」

姉「お母さんに会えますように。（祈る）ナムナムナムナム……」

紙「飯ある？」

妹「うん」

姉「いいの？ 一個だよ」

妹「うん」

姉「お腹すいたって泣かない？」

妹「うん」

姉「じゃあ、渡してあげて」

姉、リュックからおにぎりを出し、妹に渡す。

妹「神様、このおにぎりを受け取ってください」

妹、紙さんにおにぎりを渡す。

紙「受け取りました」

お「おい、何やとんねん、わしにもくれや」

姉「これは神様へのお供え物です」

お「紙さんや」

姉「え？」

お「か、み、さ、んや」

姉「紙さん」

お「せや、ペーパーや。こんなただのおっさんやで。わしより働かん、ただの木偶の坊や」

紙さん、おにぎりを食べる。

妹「あ、食べちゃった」

紙「ありがとう、ごちそうさまです。お礼に紙芝居をやろう」

妹「紙芝居ってなんですか？」

紙「世界のお話をする人だよ。ある意味神様だね」

妹「へー、やっぱり神様」

お「だまされたらあかんで、とんだ詐欺師やで全く。ちゅうか、あんた、やから紙さんって呼ばれてたんか」

妹「おじさん知らなかったの」

お「せや、おっさんのスナフキンや思っとったわ」

妹「スナフキンって何？」

お「んー難しいな、こんなんや。これのもうちよっときれいめのやつちゃ」

妹「全然わかんない」

お「今度ググって見せたるわ」

妹「今見せてよ」

お「今は紙芝居の時間や。せや、黄金バットやれや」

妹「黄金バット？」

お「せや、黄金バットや」

姉「黄金バットって何ですか？」

お「顔はガイコツ、全身金色でパンツ一丁、マントを広げて高笑いと共にやってくるおっさんや。『カッカッカッ』言うてな」

姉「変態じゃないですか」

お「変態ちゃうよ、ヒーローや。『強い強すぎる！』ってゆうてな」

妹「弱そ」

お「めっちゃ強いで」  
妹「どれくらい？」  
お「うーん、地球わんで」  
妹「わんで？」  
姉「割るってことじゃないかな」  
お「解説すな、強さが半減してしもうたやないか」  
姉「神様」  
お「紙さんや」  
姉「紙さん、何ができるの？」  
妹「黄金バットできる？」  
紙「できない」  
お「なんやねん、何やったらできるんや、貸してみい」

おっさん、紙さんの荷物をあさる。

お「……ん、ん、ん、ん、全部真っ白やないかい。やっぱこいつ詐欺師や、ペテン師や、  
どうせお話は自分らで作れとか言うんやろ」  
紙「……」  
お「凶星やないかい。しっ、しっ、しっ、しっ、もう、どっかいけや。こいつらをたぶら  
かすのはやめてくれ」  
紙「ごめんなさい」  
お「なんやねん、やけに素直やないかい。こっちが恐縮してまうわ」  
紙「あの、お花見に行きませんか？」  
お「なんやねん、今更花見って」  
紙「いい場所知ってるんで。あの、みんなでお弁当広げて、あの、奢りますから」  
お「おにぎり恵んでもらったやつがどうやって奢るんや」  
紙「それはもう任せてください」  
お「どうするよ、こうゆうとるけど」  
妹「紙さん、あのね、私たち行かなきゃいけないの。だから、道草できないの。ごめんね、  
ありがとう。お花見行きたかったけど」



紙「僕の背中に乗りなよ」

妹「えっ」

紙「僕の背中に乗りなよ」

妹「え、うそ、いいの」

紙「もちろんだよ、おにぎりのお礼だ」

妹「お姉ちゃん」

姉「また戻って来る？ お母さんの」

紙「もちろん、送っていくよ」

姉「やったー」

妹「やったねお姉ちゃん」

お「そういうことやったらな、うちもええか」

紙「もちろん、足は拭いてくれよ。ほら早く乗るんだ、ちゃんとつかまるんだよ」

姉妹、おっさん、紙さんの上に乗る。

妹「すごいふかふか、ね、おじさん」

お「おう」

姉「おじさん、怖いんでしょ」

お「アホか、怖いことあるか」

紙「じゃあ行きますよ。しっかりつかまって」

紙さん、上昇。

お「うおおおおおーい」

姉妹「うわーーーー」

妹「すごーいどんどんちっちゃくなってく。おじさん、ちゃんと目開けなよ、米粒みたいだよ」

お「あかん、漏らしてまう。高所恐怖症やったの忘れてた。神様、仏様、降ろしてくれ、怖い」

紙さん「途中下車はできませんよ」

姉「ほら、途中で見たゴミ袋があんなにたくさん。きれいだね。おじさん、ほら、おじさんの好きなトラックもたくさんだよ、ほら目開けて」

お「よっしゃ、開けたんで一開けたんで一お一めっちゃトトロや。トトロや。この状況は100パーセントのトトロや」

姉「また変なこと言って。ほら、向こうに行く車には何も積んでないでしょ、だから、向こうから持ってくるんだよ」

お「なるほどなー。そ、そんなん知ったわ」

妹「紙さん」

紙「何だい？」

妹「紙さんはどこから来たの？」

紙「向こうの方だよ」

妹「向こう」

紙「うん、向こうの方。向こうの方で僕はみんなと暮らしてたんだ」

妹「みんなは？」

紙「そこにいるのもいるし、いないのもいるよ」

妹「私もそこに行ってみたい」

姉「くうちゃん、お花見行くんでしょ」

お「せや、花見や。でも、花よりだんごやで一」

紙「じゃあ、買い出しに行きますか」

姉妹「(手を挙げ) おー」

お「(手を挙げ) おー、あかん、手、離してまう。せやけど、こんなに広がったんやな」

姉「見て」

お「なんや？おっ、豚が走っとるやん、子豚もおるな、その横に瓜坊もくつついとる、なんや、かけっこかいな」

妹「ほら、ちょっと離れたところにダチョウもいるよ」

お「ほんまや、二頭並んで、つがいかいな」

紙「そろそろ着きますよ、つかまって」

紙さん、下降。

お「おう、ゆっくりな、ゆっくりな、ゆっくりゆうとるやんけー」

姉妹「わーっ」

スーパーに到着。

お「ほんま、寿命縮んだわ」

姉「立派なスーパーだね」

紙「最近できたんだよ」

妹「おっさんばかり」

お「こら、そんな言葉使ったらあかん」

妹「おじさんのせいだもん」

姉「でもほんと、私たちみたいなのいないね」

紙「ほら見てごらん、レジ」

お「ん、誰もいないやないかい。ほおー、紙さんの言いたいことわかったで。盗み放題ちゆうこっちゃ」

紙「セルフです。人手がないんですよ。店員さんはちゃんといます」

お「そなん、知とったわ」

紙「では買ってくるので、ここにかけて待っててください」

紙さん、買い物へ。

お「あいつ、ほんまに盗む気やないやろな。あいつが戻ってきたら、近づいたらあかんで。一緒や思われるからな。ん、どうした」

姉、泣く。

姉「なんか、思い出しちゃった」

お「なんやねん、なんやねん、虐待や思われるやないか」

妹「お母さんね、スーパーでいなくなったの」

お「スーパーで？」

妹も泣く。

妹「うん、三人で買い物に来てたんだけど、いなくなっちゃったの。えーん」

お「大丈夫や、スーパー大丈夫や。今日会いに行くんやろ、おっちゃんからもきつく言う  
たるわ、もうどこにも行かんとしてーってな」

妹「約束」

お「せや、約束や」

紙さん、両手に買い物袋を持って登場。

紙「お待たせ」

お「買いすぎやろ」

紙「持って乗ってみて」

姉妹先に乗る。

姉妹「よいしょ」

次いで、荷物を持ったおっさんが乗ろうとする。

お「じゃあ、失礼すんで」

紙「重い。あー無理無理無理、重い」

姉妹、紙さん、おっさんを見る。

お「なんやねん、その目は。わしも花見行きたいわ」

姉「じゃあ、一個にしようか、それぞれ」

お「しゃーないな」

姉妹とおっさん、それぞれ、好きなのを一つ選び、紙さんに乗る。おっさん持っていけないものを隠す。

妹「何してるの？」

お「あとで取りに来るんや」

紙「じゃあ行きますよ」

紙さん、上昇。

お「おっ、大丈夫そうや、大丈夫そうやで、もう慣れたで、慣れたで、あーあかん、慣れへん」

姉、下に標識を発見。

姉「あっ、見て、月の下だって」

妹「ほんとだ、じゃあ私たちお月様だね」

紙さん、下を眺めている。

妹「どうしたの？」

紙「なんでもない」

お「なんやねん」

紙「もう着きますよ」

紙さん、下降。

紙「はい、着きました」

小高い丘に到着。桜が咲いている。

お「もう雑いわ、ほお、ちょっとした山やなここは」  
妹「誰もいないね」  
姉「桜はいっぱいなのに」  
お「なんか書いとるわ、読まれへんけど」  
妹「あっちが海で、あっちから来たんだよね。で、あっ、スーパー」  
姉「ほら、そこに学校もあるよ」  
妹「本当だ」  
お「草ボーボーやな、なんや石が転がっとるわ」  
紙「隠れて」  
お「なんやねん」  
紙「いいから」

全員しゃがんで身を隠す。

紙「もう大丈夫」  
妹「何だったの？」  
紙「写真だよ」  
妹「写真？」  
紙「うん、最近増えたんだ。気をつけないと」  
お「もう堪忍やで」  
妹「あ」  
お「なんやねん、驚かすなや」  
妹「お姉ちゃん、看板」  
姉「『上の町（うえのまち）B遺跡』だって、縄文時代の遺跡みたい」  
お「ほんまか、でもB遺跡ってAもあるんかいな、味気ない名前やで。そうやな、桜遺跡はどうやる」  
姉「そのまま」  
お「うるさいのお……ほらこの木の下で食べんで」

四人、桜の木の下に座り、食料を出す。

皆「かんぱーい」

飲んだり食べたり。

姉「さっき、下見てたのどうしたんですか？」

紙「ああ、ある女の子を思い出してね」

お「(小指をあげ) コレか」

姉「お友達？」

紙「友達で、紙芝居の先生かな」

お「なんや、つまらんのお」

紙「僕が昔、みんなと暮らしていた頃、その娘がよく遊びに来てくれたんだ。で、たくさんのお話を聞かせてくれた。七夕の話。牛と牛とが逃げ出す話。トドがイチローに憧れる話。僕たちはその娘の話聞いて、とても楽になった。楽になったんだよ」

姉「その娘もここにいたの？」

紙「ああ、いた。でも、お月様にはなれなかった」

お「誰もお月さんにはなれへんで。なれるのはうさぎさんだけや」

紙「ここからもう少し行ったところに夜ノ森(よのもり)公園っていう場所がある」

妹「よのもり？」

紙「ああ、夜の森と書いて夜ノ森」

お「月の下に夜ノ森て、なんやロマンチックやな」

紙「みんなと離れて、一人になった後、僕はこの町で暮らし始めた。ここで仲間たちもできた。そんな時、月の下で彼女と再会したんだ」

お「その娘となんか話したんか？」

紙「いや」

妹「なんで？お友達なんでしょ」

姉「その娘はどこに行ったの？」

紙「ひとしきりこの辺りを見た後、夜ノ森に向かったよ。それが遠いんだ。歩くととつてもね。ちょうど四月のことだった」

妹「背中に乗っけてあげたらいいのに」

お「せや、薄情もんやで」

紙「夜ノ森は桜の名所なんだ。道沿いに桜が咲き誇り、たくさんの人が訪れる。夜の森を照らすようにね、でも」

お「なんやねん」

紙「紙芝居をしてもいいかな」

お「なんやねん、いきなり、忘れとったわ、できるんかいな」

紙「これは、新しい仲間たちに聞いた話だ」

お「期待してんで」

紙さん、みんなの方を向いて紙芝居を始める。

紙「イワナの嫁入り」

お「キツネやん」

紙「えーあるところに、えっとある村に、いや、川底にイワナたちが住んでいました」

お「どこやねん」

姉「静かに」

紙「ある時イワナのイワ子は嫁入りすることになりました。みんなは祝福します。おめでとう、おめでとう」

紙「相手のところに行こうとしたら、背中に重みを感じました。うう、重いわ」

紙「見ると神様が背中に乗っていました。神様は言いました、私は神様だから、仕事がある。だから、里の村まで連れて行っておくれ」

紙「イワ子は、結婚式に行きたかったけど、諦めて、神様を連れて行きます。はあはあはあはあ」

紙「ようやく、村に着きました。神様は言います、ありがとう、次も頼む。イワ子は疲れすぎて死にました」

紙「神様は桜の木にヒョイっと飛び移りました。するとどうでしょう、桜が咲きました」

紙「村人はそれを合図に稲を植えました」

紙「夏には祭り囃子が響き渡ります。ぴーひゃらどんどん、ぴーひゃらどんどん」

紙「災いもちよっとあったけど」



紙「秋にはたくさんのお米が実りました」

紙「村人はそのお米をお供えし、神様を担いでお神輿にし、また、山の方へと運んで行きました。わっしょいわっしょいわっしょいわっしょい」

紙「終わり」

お「全然わからへん。ほんま全然わからへん」

姉妹、わかったかのようにうなづく。

お「なあ、何いっちょまえに頷いとんねん。ほんま、ツッコミたくてツッコミたくてしょうがなかったわ、ここまで何回出かけたかわからへん。ほんま何を言いたいねん。なんも伝わってこうへんわ」

妹「続きは？」

紙「終わりだよ」

妹「夜ノ森の話」

紙「聞きたいかい？」

お「もったいぶるなや」

紙「大したことじゃないよ。あの後、ほら、僕らが一番最初に出会った橋があったろう？あそこに来たんだ」

姉「えっ、自殺したとかそんな話？」

紙「違うよ、ずーっと海を見ていた」

妹「ずっと？」

紙「うん」

姉「それで？」

紙「帰った」

妹「どこに？」

紙「さあ、駅前からのバスだ。あいにく僕は字が読めないから。でもバスが見えなくなるまで見送ったよ」

妹「また来るといいね」

紙「うん」

お「あっ、これから結婚式があるんや。結婚式のスピーチせな」

姉「またビンゴですか？」

お「せや、これからもっと忙しくなんで。忙しくしていかなあかん」

姉「私たちもお母さんのとこ行かないと」

妹「私たちの神様は反対だね」

お「ん？」

妹「背中に乗られるんだもん」

お「せやな、神様、超特急で頼むわ」

紙「わかりました。ではつかまって」

紙さん、上昇。

(了)